
書 評・紹 介

Hein de Haas

How Migration Really Works: A Factful Guide to the Most Divisive Issue in Politics

Penguin Books, 2023, 464pp.

本書は、移民問題をめぐる感情的な論争に終止符を打つことを目指した一冊である。社会学、地理学、政治学といった社会科学の知見を縦横無尽に駆使し、国際人口移動をめぐる22もの誤解（「神話」）を丁寧に解きほぐす本書は、副題よろしく「最も分断的な政治課題への事実に基づくガイド」である。移民政策の重要性が声高に叫ばれつつも、「論争」となると感情的な賛否の応酬に終始しがちななか、本書の実証的かつ包括的な視点は、感情論が支配する現状から脱却し、建設的な「議論」に至る道筋を示している。

著者のハイン・デ・ハースは、アムステルダム大学とマーストリヒト大学で教授職を務める、現代移民研究の第一人者である。モロッコをフィールドとする社会地理学研究から出発し、長く「国際移民研究所（IMI）」を率いてきた。移民と開発の関係性分析、「意欲—潜在能力モデル」の提唱、45カ国の移民政策変化に関する広域的・長期的データベース構築など、その業績は多岐にわたる。英米圏での移民研究の標準的テキストである『国際移民の時代（*The Age of Migration*）』（Bloomsbury, 2019）の最新第6版の筆頭著者としても知られる。

本書は、デ・ハースの広範な研究業績を、一般読者にも親しみやすい文体で「全体的な」視点からまとめ上げたものだ。そのため、彼の研究に通じた専門家には、内容面で目新しい発見は少ないかもしれない。しかし、本書の真価は、国際移動という複雑な現象について、事実に基づいた全体像を余すところなく提示している点にある。出版から一年余りで10ヶ国語以上への翻訳が決まっているという事実は、本書の提示する全体像が、世界中で議論の触媒となりつつあることを示しているよう。

本書は3部構成、全22章からなり、各章は「神話」を提示し、その起源を示した上で、「実際はどうか」を説明する形式となっている。デ・ハースは、各「神話」に対し、長期的な統計データ、国際比較、理論的知見を駆使し、通俗的な理解や政治的レトリックとは異なる包括的かつ多角的な分析を行う。例えば、「移民規模は史上最大である（神話1）」には、移民数は増加しているものの、世界人口も増加しているため、人口比で見れば移民の割合は1960年以降約3%でほぼ一定であると反証する。「入国制限は移民の流入を減少させる（神話21）」には、規制強化は一時的に移民流入を減少させても、非正規移民や密入国ビジネスの増大を招き、短期労働目的の移民に長期滞在や定住のインセンティブを与えるという実証的知見を提示する。こうした分析を通じ、国際移動がいかに社会構造に深く組み込まれ、矛盾や問題を内包しつつも、社会内在的なプロセスとして成立しているかが示される。

本書の特徴は、(1) 移民を社会内在的なプロセスとして捉える視点、(2) 左右双方の神話へのバランスの取れた批判、(3) 「トリレンマ」の自覚と「どんな社会で生きたいか」という問いの重要性、の3点にまとめられよう。

第一に、デ・ハースは、移民を解決すべき「問題」や諸問題の「解決策」といった短絡的な二元論では捉えず、社会システムに内在するプロセスとして理解する。移民に賛成か反対かを問うのは、経

济学者に経済に賛成か反対かを問うようなもの、という比喻は、この視点を象徴する。経済政策の良し悪しは議論の対象となりうるが、経済活動そのものは普遍的な現象であり、その存在自体に賛否を問うことは無意味である。同様に、移民も人類史を通じて常に存在してきた社会のダイナミズムの一部であり、現象自体を客観的かつ全体的に見つめる必要がある。それでこそ、単に移民の数を増やす、減らすといった表面的な議論ではなく、移民が社会全体にどのような影響を与えるのか、そのメカニズムを理解し、より長期的かつ包括的な視点から議論することが可能になる。これが本書全体を貫く重要なトーンである。

第二に、本書は、移民問題を巡る言説が、右派と左派の双方によって、それぞれの政治的立場を正当化するための「神話」に満ちていることを明らかにする。デ・ハースは特定のイデオロギーに偏らず、左右双方の主張に対し、等しく批判的な目を向ける。例えば、右派は「移民は仕事を奪い賃金を引き下げる（神話8）」「移民は福祉国家を弱体化させる（神話9）」と批判するが、全体として見れば移民は労働力不足を補い、福祉国家を支えている。左派は、人道的危機感を煽るために難民数を誇張し（神話3）、悲惨な状況から決死の逃避を試みる「被害者」として移民を描く傾向がある（神話6）。また、「気候変動が大量移民を引き起こす（神話22）」「移民は全ての人々を豊かにする（神話14）」といった一面的な主張も少なくない。本書は、このように左右双方の極端な主張を退け、客観的なデータに基づき、移民問題の複雑な現実を多面的に描き出す。

第三に、移民現象の全体像から導き出されるのは、それが政治的には「トリレンマ」に囚われている、という逃れがたい現実である。これは、(1) 移民をコントロールしたいという政治的願望、(2) 移民を求める経済的利益、(3) 移民・難民に対する基本的人権の尊重という3つの目標が、現代のグローバル化した世界において、互いに矛盾し、容易には両立し得ない状況を指す。デ・ハースは、この構造的矛盾が移民政策の混乱の根源であり、直視せずには効果的な政策立案は不可能だと指摘する。しかし現実には、政治家、国際機関、活動家、学識者らが、自らの立場を正当化するためにトリレンマの一部分だけを強調し、他を軽視している。例えば、移民反対派は「コントロール」を重視し経済や人権を無視する一方、擁護派は「人権」を絶対視して他の現実的課題から目を背ける。このような各方面によるトリレンマの一面的な強調や歪曲が、移民問題をめぐる論争を不毛なものにし、建設的な政策論議を妨げているのである。

こうした現実を前に、デ・ハースは、「私たちはどんな社会で生きたいか」という根源的な問いに改めて向き合うことの重要性を説く。これは単なる理想論ではない。少子高齢化、経済の停滞、社会保障制度の危機など、困難な現実を直視し、私たちがどのような未来を望み、そのために何を選択し、何を犠牲にする覚悟があるのかを問うている。興味深いことに、この問いを考える上での「好例」としてデ・ハースが取り上げるのが日本である。日本は、他の先進工業国と比較して移民の割合が相対的に低い。それは、文化的・地理的な要因だけではない。技術革新、高齢者の就労促進、労働市場の規制、そして低成長の受容などの一連の選択が、移民に大きく依存しない社会という、ありえたかもしれない未来の姿を示していた。しかし、これもまた過去のものとなりつつある。現実の日本は、人口減少と高齢化に直面し、移民受け入れへと舵を切った。「どんな社会で生きたいか」という答えもまた、変化する現実への適応なしには成立しない。

デ・ハースの主張は明確だ。私たちには選択肢がある。しかし、どの選択肢も容易ではない。経済・社会システムの根本的な改革と、それに伴う痛みを引き受ける覚悟が求められる。本書は、その選択と覚悟のための、ファクトフルな羅針盤にほかならない。

(宮井健志)